

呉春筆泊船図襖（醍醐寺三宝院）について  
——呉春の絵画理念との関連から——

仁方越 洪輝（大和文華館）

江戸時代の絵師・呉春（1752-1811）による醍醐寺三宝院の泊船図襖は、落款書体と画風の検討から呉春晩年期の作とされている。水墨の濃淡を巧みに利用して大型船が描かれ、いずれの船も苫で覆われ碇綱が下ろされているため、停泊している様子だと知られる。従来の作品解説では迫真的な描写や作品の有する情趣性についての言及が多い中で、右端襖の一艘を帆柱だけで表した構図の大胆さを俵屋宗達から歌川広重に至る流れの中で位置づけて、本図の新時代性に注目した河野元昭氏の解説は重要である。しかし、河野氏の見解のみにとどまらない本図の新奇性を図像面から指摘するとともに、呉春の絵画理念と結びつけて本図を解釈するのが本発表の目的である。

はじめに、斜め後ろから描かれた船の図像について考察する。船は水辺の添景として描かれる場合も多く、絵画化された例は少なくない。江戸時代に広く読まれた『芥子園画伝』中にも「泊船」として停泊する船の図や、小舟を繋いだ「巨艦」の図が確認される。特に「巨艦」図では、斜め後ろから船が描かれており注目される。他にも、清明上河図など日本でも流通した中国絵画には既に斜めから描かれた大型船が確認される。一方で、泊船図襖に描かれたのは、江戸時代に入ると広く海運に利用された「和船」であり、中国絵画における船や文人高士が乗るような小舟とはやや異なっている。師であった与謝蕪村（1716-1783）の没後に、呉春が門を叩いたとされる円山応挙（1733-1795）の「真物を臨写」して絵画制作を行うべきという理念は周知の通りである。したがって本図の船は、呉春が中国絵画等の古画に学びながら写生的要素を加味し、新たに創造した図像であると主張する。

次に、泊船図襖の主題として当世の大型荷船が描かれる理由を、呉春および蕪村の言葉から解釈する。まず、三宝院という場所に俗な主題を描いた理由として、蕪村が俳諧について「俗語を用て俗を離るゝを尚ぶ」と述べた『春泥句集』序に注目する。蕪村は無理しても得られない「離俗」への捷徑として詩を語ることを勧めており、ここでの「詩」はかな書きの俳諧に対する漢詩と理解できる。泊船図襖は、『芥子園画伝』はじめ中国絵画の図像に学びながら俗な主題を用いた、まさに呉春なりの「離俗」の実践だったと考えられる。

『画乗要略』では、古画や名家の良いところを学びしかも囚われることなく変化すべきと常に呉春が語っていたとされるが、これは蕪村の俳諧論に近い内容である。したがって、呉春が蕪村の俳諧論を絵画制作に応用していたと知られる一方、『画乗要略』中で先の内容に続く「別に自ら機軸を出す」という部分は呉春自身から出た言葉とすれば、呉春が意図的に新しさを求めたと考えられ、主題に当世の大型船を用いたのは新奇性の志向とも解釈できる。以上から、俗の要素と新奇性を兼ね備えた主題が選ばれた泊船図襖を呉春の独創性が表れた作品と位置づけたい。